

令和6年度 東原彦舎中央校 校内研究

1 研究主題

多久市の研究

自ら生活を創造していく力を育む教育の推進
～児童生徒・家庭・地域が誇れる義務教育学校としての教育実践を通して～



令和6年度 中央校研究主題

主体的に学びに向かう児童生徒の育成 「1年次」
— 9か年の学びの連続性と系統性を意識した指導を通して —

キーワード 主体的 学びの連続性と系統性 教師力向上プロジェクト

2 主題設定の理由

(1) 教育の今日的課題から

知識基盤社会やグローバル化が進展した今の社会を生きる児童生徒には、自ら課題を見つけ解決する力やコミュニケーション能力、物事を多様な観点から考察する力(クリティカル・シンキング)、そして様々な情報を取捨選択し、活用する力などが求められている。今後の Society5.0 時代が到来する中、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代が到来し、社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされている。

このような中で、学校においては児童生徒が社会の変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を育成することが必要になってくる。このため、学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」という理念のもと、「カリキュラム・マネジメント」や「主体的・対話的で深い学び」の視点から学校教育活動の改善が求められている。

(2) 前年度までの研究から

本校の校内研究においては、令和3年度に佐賀県教育委員会から「プログラミング教育」の指定を受け、研究主題を「9年間の系統性を意識した確かな学力の育成」、副主題を「プログラミング教育の視点を生かして」と設定し、2年間の研究に取り組んできた。研究の成果として、以下の4点が挙げられる。第1に、教職員がプログラミング教育に対する理解を深めたこと。第2に、9か年を見通して児童生徒に身に付けさせたい力(プログラミング的思考力)を整理したこと。第3に、一人一授業実践の取組を通して、プログラミング的思考を活用できる教科や領域が拡大したこと。第4に、児童生徒や教職員の ICT 機器操作のスキルアップにつながったことである。一方、課題として、以下の2点が挙げられる。第1に、児童生徒に確かな学力を付けるためにプログラミング的思考力の活用という手立ての有効性の検証が困難であったこと。第2に、研究の在り方として、前後期での職員のつながりが見られにくく、9か年の系統性を意識した実践が十分ではなかったことである。

(3) 児童生徒の実態(教師アンケートから)

これまでの実践においても児童生徒に資質・能力を身に付けさせるために学習内容や実態に応じて授業展開や板書、ICT を利活用するなどして、児童生徒が主体的に学べるように指導法を工夫してきた。しかしながら、昨年度在籍した教師を対象に「次年度の校内研究について(児童生徒の学習面の課題)」のアンケートを実施したところ、児童生徒の学び方に関する課題が浮き彫りになった。具体的には、学習意欲がなく、教師の指示待ちの児童生徒が多い、教科書を開こうとしない、ノートをとろうとしない児童生徒がいる、授業の妨害をする児童がいるといった内容であり、児童生徒の学ぶ意欲や主体性といった観点の内容が多かった。

(4) 義務教育学校の特徴から

本校は、平成29年4月に中央小学校、中央中学校を「義務教育学校」として「東原摩舎中央校」として開校した。本校は、9年間を以下のような3つの段階に分けている。

1年生～4年生(低学年)	基礎期	学びの習慣化
5年生～7年生(中学年)	充実期	学びの定着・発展
8年生、9年生(高学年)	発展期	自己学習力の形成

1年生から4年生を基礎期とし、学びの習慣化、5年生から7年生を充実期とし、学びの定着・発展、8年生及び9年生を発展期とし、自己学習力の形成を目指すこととしている。このようなシステムを取り入れることで9年間を見通した、連続性と系統性をもたせた指導体制を確立し、系統的で継続的な一貫した学習指導ができるようにしている。

以上のような教育の今日的課題や前年度までの研究の課題、児童生徒の実態、義務教育学校の特徴を踏まえ、学びの連続性や系統性を重視した指導を充実させることで、主体的に学びに向かう児童生徒を育成できるのではないかと考えた。そこで本研究では、主題を「主体的に学びに向かう児童生徒の育成」、副主題を「9か年の学びの連続性と系統性を意識した指導を通して」と設定し、実践的研究に取り組むこととした。なお、今年度の研究は、3年間計画の1年次として設定することとする。

3 主題の捉え方

・学びとは

本研究では、「学び」を各教科等で育成を目指す資質・能力及び学習内容と定義する。

・学びの連続性と系統性とは

本研究では、「学びの連続性」を学びが連続して切れ目なくつながっていること、「学びの系統性」を学びが一定の順を追って、または、原理によって、並んでいるつながりのことと定義する。

4 研究の目標

各教科の指導において、主体的に学びに向かう児童生徒を育成するためにはどのような手立てが必要か指導法の在り方を探る。

5 研究の仮説と目指す児童生徒像、教師像

(1) 研究の仮説

各教科の指導において、9か年の学びの連続性と系統性を意識し、育成を目指す資質・能力に合わせて指導法を工夫することで、主体的に学びに向かう児童生徒を育成することができるであろう。

(2) 目指す児童生徒像

本研究では、主体的に学びに向かう児童生徒の姿(9年生でのゴールの姿)を学ぶことに興味や関心を持ち、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次の学習へつなげることができる児童生徒¹⁾とする。

※上記の児童生徒像を各教科や単元、1単位時間の授業でさらに具体化していく。

6 研究の内容及び方法

(1) 研究の内容

① 9か年の学びの連続性と系統性を意識した授業づくり及び実践

ア 育成を目指す資質・能力の整理(教科部会)

イ 授業づくり及び実践 一人一実践

(学びの連続性と系統性を意識し、育成を目指す資質・能力や学習内容に合わせて指導法を工夫する)

② 教師力向上プロジェクトの実施

ア 定期的なミニ講義の実施

イ 『校内研通信』の発行 ～〇〇先生に学ぶ～

③ 研究成果の検証

ア 教師、児童生徒アンケートの実施、集計、分析

イ 児童生徒の学ぶ姿の変容(抽出児 児童生徒の振り返りなどから)

(3) 研究のイメージ図

